

最近相談のあった園芸に関する質問等について記載いたします。

**降霜、霰の時期となってきました。ちょっとした保護で被害回避に努めましょう。**

今年は暖冬傾向ですが、それでも霜は 3 回ほど降りており一部葉の傷みが見られています。今後、降霰がありますと葉物やブロッコリーなどが傷みます。特にブロッコリーでは、強い霜に当たると花蕾が黒変し腐ります。収穫期にきているキャベツは降霰により裂球の引き金になる場合もあります。不織布（パオパオなど）や寒冷紗をかけておくことで被害がかなり回避できます。

今月末からは積雪の可能性も出てきますが、エンドウやソラマメなど豆類は雪で地面に押し付けられると傷みや腐りが発生しますので、ワラやモミガラを敷きます。ただし、この作業を早めにしますと、その後の風で吹き飛ばされ無くなったり、強い霜が降りた場合、**地面からの熱を遮断することによりかえって霜の害が強くなったりしますので、降雪の状況を見極めて作業を行ってください。**

**Q：秋ジャガを作ったが、いつ掘ればよいのか？**

A：ジャガイモの生育日数は約 90 日間です。8 月終わりから 9 月上旬に植えつけられたとすると 12 月上旬には掘り取れますが、本県では 2 回ほど霜にあたり地上部が傷んだ頃掘り取ります。また、翌春掘り取る方もおられます。土中で越冬する場合は降雪の具合や圃場排水の状態により傷みが出る場合もあります（ジャガイモの保存温度は 3 ~ 4 以上とされております）排水の悪い畑ではお奨めできません。

**Q：菜園に除草剤が飛散して薬害が出た。これらの野菜は食べられるか？**

A：農薬取締法では栽培されている野菜に登録のない農薬については適切な対応を払いの飛散しないように定められております。食品安全に関する法律では残留農薬の濃度が 0.01ppm 以下であれば流通に乗せても問題ないとなっています。除草剤については劇物と普通物があり、農薬の特性として野菜体内に浸透するもの、しないものがあり、野菜自体そのまま食べるもの、皮をむいて食べるもの、加熱して食べるものなどがあり、現場圃場の目視で食してよいかどうかの判断はできません。上記の質問がなされればそう答えるしかありません。なお、残留濃度を測定しようとする、2 万円から 10 万円の分析料が発生します。

**Q：サトイモを掘ったが、子芋をすべて食用に廻したい。ガシラを来年の種芋として利用できないか？**

A：結論としては**ガシラを種芋として利用することは可能**です。ただしガシラは大きくまた、芽の数が多いので頂芽を除き大きさにより適宜分割（2 ~ 6 個程度）し利用します。この場合、切口を乾かすためのキュアリング措置が必要となるため一般的ではありません。

**Q：ハウスイチゴのウドンコ病が治まらない。**

A：ウドン粉病防除薬剤は多くあります。予防剤、治療剤も豊富にそろっています。主なものとしてストロビー、ピラニカ、ベルコート、フルピカ、アミスター、パンチョ、ポリオキシソ、トリフミン、ラリーなどです。今回はパンチョを薦めておきましたが、**散布に当たって重要なことは、掛け残しをしないよう丁寧に行うこと、ハウス内の**

湿度を上げないようにするため、できるだけ晴天の午前中に作業すること。また、うどん粉の病菌はハウス内の雑草はじめ、資材等にも付着しているのでその点も考慮して作業することです。一般論として、病害虫被害防止のためには、ハウス内と露地畑などを頻繁に行き来しないことです。靴や服などに病原菌や害虫を付着させたまま持ち込む可能性が高くなり、温度のあるハウス内で一挙に増殖し、蔓延しないとも限りません。

## 窓口対応の農力アップメモ

### 代表的な肥料の特徴と使い方（1）

以下の説明の前に・・・植物が成長するために最も大事な養分は窒素です。一口に窒素といっても形態は様々ありますが、圃場に施用されると土壤中の菌などにより分解されます。最終段階でアンモニア態チツソとなり、さらに硝酸態チツソに変化し作物に吸収されます。ここで知っておかなければならないことは、**野菜など園芸作物は硝酸態チツソ、稲などイネ科（野菜ではトウモロコシ）は硝酸態チツソとアンモニア態チツソを吸収する**ということです。

A：園芸肥料の代表として「そ菜3号」と「あさひ」があります。また、JA たんなんでは「そ菜5号」もあります。その使い方は？

Q：「あさひ」は窒素（N）16%、燐酸（P）10%、カリ（K）12%、ホウ素（B）0.2%含みます。このチツソ 16%の内アンモニア態が約 6%、硝酸態が約 9%と若干のジシアン態チツソを含みます。このジシアンがチツソの硝化作用（アンモニア態チツソを硝酸態チツソに変化すること）を遅らせる働きがあります。つまり、チツソを長く効かせる効果を持っています。よって、使用方法としては**元肥とします。また、栽培期間の長い作物（トマト、ナスなど）では追肥としても使用**されます。

「そ菜3号」は「そ菜1号」、「そ菜2号」が改良されて「そ菜3号」となったと聞いております。肥料成分は窒素（N）16%、燐酸（P）10%、カリ（K）14%を含みます。このチツソ 16%の内訳はアンモニア態が 6.5%、硝酸態が 9.5%で、ジシアンは入っておりません。従って施用されると即効的に効いてきます。よって**野菜の追肥用に使用**します。また、**生育期間の短い菜っ葉などでは元肥とする**場合もあります。

この肥料は極めて水に溶けやすいので、**液肥としても利用**できます。使用にあたっては 500 倍以上（5 リッターのバケツにそ菜 3 号を 10g）に薄めて使います。また、空気中の水分を吸収して肥料が溶け出しますので、使用後は必ず袋の口を閉めておかなければなりません。

「そ菜5号」は「そ菜3号」と似てはいますが「そ菜3号」の流れで改良されたわけではありません。「そ菜5号」の肥料成分は窒素（N）16%、燐酸（P）10%、カリ（K）14%

でチツソ 16%の内訳はアンモニア態が 9.2%、硝酸態が 6.8%となっており、特に 10 月から 5 月の地温の低い時期は速効的な効果では「そ菜3号」に劣ります。しかし高温期においては硝化作用が早いので両者の差は殆どありません。液肥として使用する場合も溶け残りが目立ちます。使用場面は「そ菜3号」と同じく**野菜の追肥用と生育期間の短い菜っ葉などの元肥**とします。また、ホウ素や苦土などの成分を含み養素欠乏症防止対応となっています。使用後は必ず袋の口を閉めておかなければなりません。